荆合

〔中右記〕寛治六年四月廿二日甲戌、上皇○白河爲御見物、有御幸紫野、○略中此間供奉所司被相催公卿、於御車前、或有荆合興、

芝競

〔新撰六帖六〕をば　知家

こまはなつ野邊のうなひが芝くらべながき日くらすこれやなぐさめ

〔答問雜稿三〕按、芝くらべといふは、うなゐわらはどもの、つばなすみれなどをつみあつめて、おのがどちくらべあそぶをいふ、草をたゝかはすといふも同じこと也、

紅梅合

〔藤原高光集〕紅梅あはせに

鶯のすをくひそむる梅のはな色もにほひもおしくも有哉

花合

〔古今著聞集十一畫圖〕永承五年四月廿六日、麗景殿女御に繪合ありけり、彌生の十日あまりの比より其沙汰有けるは、○略中むかしよりきこゆる花合は、散てふるき根にかへりぬればにほひ戀し、草合は尋て本の所へ返しやれば、名殘うるさし、

〔長秋記目錄〕承德二年三月二日、依召參內、明日中宮○堀河后子內親王篤御方花合云々、望夜聞延引由、

〔殿曆〕長治二年閏二月廿四日壬辰、申時許爲隆來云、中宮○堀河后子內親王篤女房今日有花合、非兼日支度、自昨日被始云々、

〔新千載和歌集二春〕長治二年閏二月、中宮花合によみ侍ける、　權中納言國信

手折もて宿にぞかざす櫻花梢は風のこゝろめたさに

〔散木弃謌集一春〕堀河院御時、きさいの宮の御方にて、かたをわかちて花をおりにつかはして、御前のいづみにたてならべて、歌よませ給けるによめる、

吹風をいとひてのみもすぐすかな花みぬ年の春しなければ

〔十訓抄二〕同○堀河院御時、中宮の御方にて花合といふ事有けるに、越前守仲實が歌に、玉の身といふ